

# 名古屋市民会館のあゆみ



日本特殊陶業市民会館  
名古屋市民会館開設45周年

戦後から完成まで  
文化都市にふさわしい会館建設を目指して

## 1 復興、芸術活動活発化の中で 求められた芸術文化施設

太平洋戦争末期、工業都市であった名古屋市は空襲を受け、市街地は焼け野原となってしまった。この空襲は市民の生活に大きな被害を与えただけでなく、文化振興にも大きな打撃となった。

市民の間で文化活動が盛んになってきたのは昭和20年代後半のこと。名古屋でも1954(昭和29)年、名古屋演劇鑑賞会の前身である名古屋演劇同好会が発足した。当時、演劇関係者を悩ませたのは会場の不足。新たなホールの建設は文化関係者の熱望するところだった。

## 2 金山体育館の跡地に 近代的な会館を建設

戦後復興とそれに続く高度経済成長を受けて、名古屋市内でも文化施設の整備が進んだ。名鉄ホール、愛知文化講堂、旧御園座、中日劇場などがこの時期にオープンしている。

しかし、文化活動はさらに活発化し、発表や練習の場としての施設が追い付かない状態になっていた。これを受け、1963(昭和38)年に名古屋市民会館期成同盟が結成された。当時の杉戸清名古屋市長は名古屋市の人口200万人突破記念事業として市民会館の建設を決定した。

1969(昭和44)年、金山体育館と法務局古沢出張所等を取り壊し、その跡地に市民会館の建設を開始。1972(昭和47)年に延べ床面積約2万8,000㎡、大ホール(2,311席)、中ホール(1,156席)、会議室等を備えた市民会館が完成した。

開館、そして文化・芸術の一大発信基地へ

## 1 言わばクラシックの聖地 名フィルのホームグラウンドに

1972(昭和47)年10月1日、名古屋市民会館の完成記念行事が行われた。この年は名古屋演劇鑑賞会の名演小劇場、大須の七ツ寺共同スタジオなども開館しており、この地域の文化・芸術に関する施設が整備された1年となった。

バレエ・クラシック・オペラ向きの大ホールと、日舞・邦楽・演劇向き中ホールを持つ市民会館は、当時国内最高水準かつ国際水準の設備を誇り、国内外の多くの芸術家、アーティストが公演を行った。中でもクラシック音楽の振興に果たした役割は大きい。1966(昭和41)年に誕生した名フィルは、市民会館を演奏会



●金山体育館



●開館を告知するポスター



●名フィル定期演奏会パンフレット

のホームグラウンドとし、以降定期演奏会を市民会館で開くようになる。また、1978(昭和53)年に始まった名古屋国際音楽祭、1983(昭和58)年から開かれている名古屋クラシックフェスティバルの会場として使われるなど、東海圏におけるクラシック音楽の発信基地としての機能も果たした。

また、バレエの劇場としても評価が高く、名古屋に拠点を置くバレエ団も積極的に活用した。松岡伶子バレエ団の松岡伶子氏は「オーケストラピットがあり、舞台に小道具・大道具を置くことができる奥行きや袖があり、本格的にバレエやオペラの上演ができるホールが生まれて本当にうれしかった」と話す。

## 2 コンサートから映画試写会まで 幅広い分野で利用

市民会館は歌謡曲やポップスの演奏会場、映画の試写会場、またテレビの公開録画に利用されたほか、会議室で写真や絵画の展覧会が開催されるなど、幅広い分野で活用された。

このようにさまざまな利用に対応できる優れた設備だけでなく、勤務するスタッフに「公演・舞台のプロ」がそろっていたこと



●松岡伶子バレエ団「ジゼル」公演(1977[昭和52]年)

も当時の市民会館の大きな特長だった。現在は日仏シャンソン協会日本支局長を務める加藤修滋氏は「軽音楽の集いmssが市民会館の自主企画として公演を行ったのは1975[昭和50]年のこと。当時は私たちがアマチュアで知らないことばかり。市民会館のスタッフのみなさんに公演に関するありとあらゆることを教わりました」と振り返る。これは当時のスタッフに「市民とともによりよい公演をつくる」という高い意識があったからに他ならない。

## バブル期、失われた20年を経て ～新たな時代へ～

### 1 単なる公演の場ではなく 市民に愛される存在に

そんな市民会館にとってターニングポイントになったのが、1992[平成4]年の愛知芸術文化センターの開館である。名フィルは定期演奏会の会場を市民会館から同センター内の愛知県芸術劇場に移した。ただ、こうした流れの中でも市民会館でクラシックのコンサートが行われなくなったわけではない。むしろ演目や集客予測によって愛知県芸術劇場か市民会館かを選ぶことができるようになったのは、主催者にとって大きなメリットになった。また、市民会館では学生や市民団体など、アマチュアで芸術活動を行う人たちの発表会增加。単なる公演の場でなく、「市民の『第九』コンサート」や「金山夏まつり」など、市民に身近な施設として活用されるようになった。

### 2 最高水準の文化芸術施設として 歩み続ける市民会館

その後、市民会館は2007[平成19]年7月1日からネーミングライツを導入。中京大学が命名権を取得し、「中京大学文化市民会館」になった。その契約の終了後、命名権は日本特殊陶業に移り、2012[平成24]年7月1日から「日本特殊陶業市民会館」に変更され、現在に至っている。

また、従来は伏見の御園座で行われていた歌舞伎「錦秋名古屋顔見世」が、建て替えのための代替会場として2013[平成25]年から新御園座が完成する2017[平成29]年までの間、市民会館

で行われるようになった。

市民会館は2017年に開設45周年を迎える。その間、文化受容のあり方や名古屋市内のホール事情は大きく変わったが、誕生以来、半世紀近くに渡り名古屋市における文化活動の中心的存在として名古屋市民会館が果たしてきた役割は、大きなものと言えるだろう。



●名古屋パリエ'92 (1992[平成4]年)



●第3回「金山夏まつり」市民会館前広場にて(2008[平成20]年)



●「錦秋名古屋顔見世」のまねき上げの模様(2016[平成28]年)

